広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第74集

中央3号遺跡発掘調査報告書

1989

財団法人広島県埋蔵文化財調査センター

中央３号遺跡発掘調査報告書　正誤表

頁・行	誤	正
例言・１０	ＳＫ：貯蔵穴	ＳＫ：貯蔵穴・墳墓
６・１０	『広島県文化財調査報告書第９集』「藤が迫遺跡群」	「藤が迫遺跡群」『広島県文化財調査報告書第９集』
７・１０	床面が流出しているため	床面が流失しているため
７・１１	平安時代初め頃	７世紀終わり頃

中央３号遺跡発掘調査報告書

1989

財団法人広島県埋蔵文化財調査センター

例　言

1．本報告書は，昭和63（1988）年度に実施した正原中央線道路改良工事に伴う中央３号遺跡（広島県東広島市高屋町高屋堀3378－２他）の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は，東広島市（建設課）から委託を受けて財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。

3．発掘調査は，財団法人広島県埋蔵文化財調査センター調査研究員山田繁樹・和田秀作が担当した。

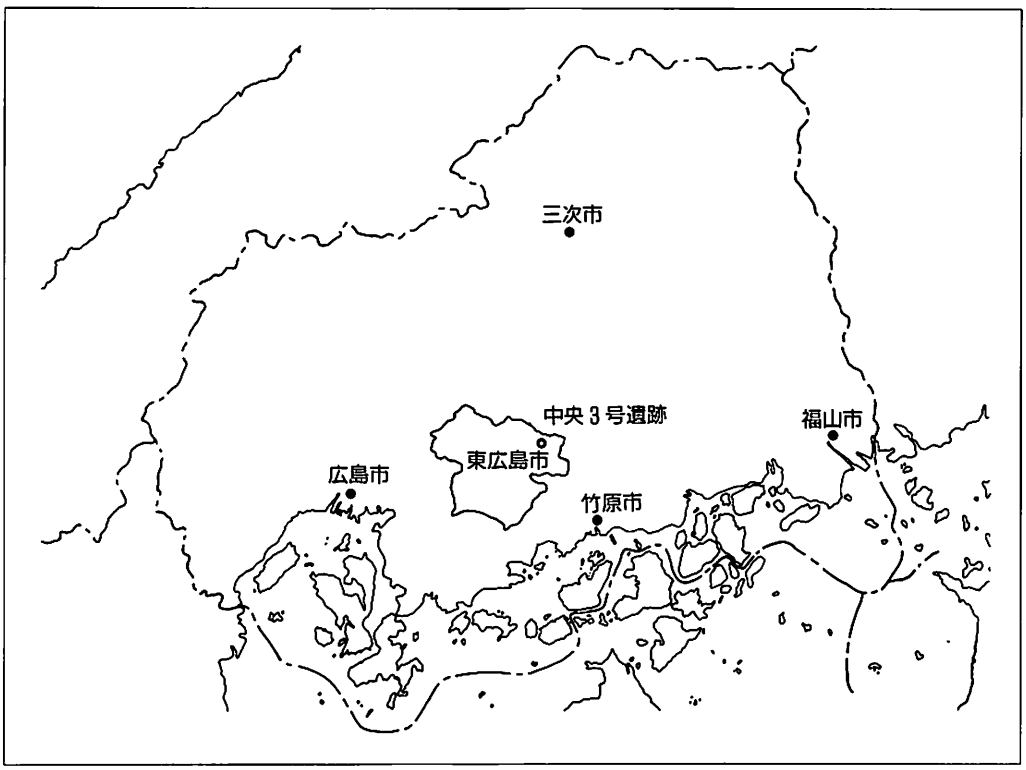
4．遺構・遺物の実測及び製図は，山田・和田があたった。また，本書の執筆及び編集は山田が行った。

5．本書に使用した略記号は，次のとおりである。ＳＢ：住居跡，ＳＫ：貯蔵穴，ＳＤ：溝，ＳＸ：性格不明遺構

6．本書に示した遺物実測図の断面は，次のとおり表現した。
弥生土器・土師質土器：白ヌキ　須恵器：黒ヌリ

7．第２図は，建設省国土地理院発行の１：25,000の地形図（白市）を使用した。

8．本文中に用いた方位は，第２図以外磁北である。



遺跡位置図

本 文 目 次

Ⅰ　はじめに……1
Ⅱ　中央３号遺跡の環境……2
　1　地理的環境……2
　2　歴史的環境……2
Ⅲ　調査の概要……7
Ⅳ　遺構と遺物……10
　1　住居跡……10
　2　貯蔵穴……14
　3　溝……21
　4　墳墓……22
　5　その他の遺構……25
Ⅴ　まとめ……30

挿 図 目 次

第１図　作業風景……1
第２図　周辺遺跡分布図（１：25,000）……3
第３図　遺跡周辺地形図（１：3,000）……4
第４図　遺跡遠景（東から）……7
第５図　遺構配置図（１：250）……8
第６図　完掘状況（東から）……9
第７図　ＳＢ１実測図（１：60）……10
第８図　ＳＢ１遺物出土状況及び完掘状況……11
第９図　ＳＢ１出土遺物実測図（１：３）……12
第10図　ＳＢ１出土遺物……13
第11図　ＳＫ１実測図（１：30）……14
第12図　ＳＫ１土層断面及び完掘状況……15
第13図　ＳＫ２実測図（１：30）……16
第14図　柱穴群実測図（１：60）……16

第15図　ＳＫ２土層断面及び完掘状況・貯蔵穴群……17
第16図　ＳＫ３・４実測図（１：30）……18
第17図　ＳＫ３・４土層断面及び完掘状況……19
第18図　ＳＫ２・４出土遺物実測図（１：３）……20
第19図　ＳＫ２・４出土遺物……20
第20図　ＳＤ１実測図（１：60）……21
第21図　ＳＤ１遺物出土状況……21
第22図　ＳＫ５実測図（１：30）……22
第23図　ＳＫ６実測図（１：30）……22
第24図　ＳＫ５土層断面及び完掘状況……23
第25図　ＳＫ６人骨出土状況……24
第26図　ＳＤ２～５実測図（１：150）……25
第27図　ＳＤ２～５土層断面実測図（１：60）……26
第28図　ＳＤ２・３・５土層断面……27
第29図　ＳＤ２出土遺物実測図（１：３）……28
第30図　ＳＸ１実測図（１：60）……28
第31図　ＳＸ１土層断面及び完掘状況……29

Ⅰ はじめに

東広島市高屋町高屋堀では，現在ＪＲ西高屋駅の北側に広がる低丘陵一帯に新住宅市街地（東広島ニュータウン）の建設が進んでいる。東広島市（建設課）は，新住宅市街地の完成によって増加すると思われる交通量に対応するために，正原中央線の道路改良工事を計画した。建設課は，昭和59（1984）年10月正原中央線道路改良工事予定地内の遺跡の有無及び取扱いについて，東広島市教育委員会に照会を行った。東広島市教育委員会は，同年10月工事予定地内の試掘調査を行い，中央３号遺跡を確認した。このため，東広島市教育委員会は，現状保存できない場合は事前に発掘調査を行い，記録保存することが必要である旨を通知した。建設課と東広島市教育委員会では，協議を重ねたが工事の設計変更は不可能であるとの結論から，昭和62（1987）年12月，東広島市は財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下センターという）に発掘調査を依頼し，昭和63（1988）年４月１日センターと委託契約を締結した。

発掘調査は，昭和63（1988）年４月11日～６月25日まで行い，６月25日には，隣接地で調査を行っている天神遺跡と合せて，東広島市教育委員会と共催で遺跡見学会を開催したところ，約200名の参加があった。

なお，調査に当たっては広島県教育委員会の指導を得るとともに，東広島市建設課，東広島市教育委員会及び地元の方々から多大なる協力を頂いた。記して謝意を表したい。

第１図　作業風景

II　中央3号遺跡の環境

1．地理的環境

中央3号遺跡は，東広島市高屋町高屋堀3378－2他に位置している。

東広島市は，広島県南部のほぼ中央に位置しており，昭和49（1974）年に志和町・八本松町・西条町・高屋町が合併して新たな市として発足した。市域の中心となる西条盆地は，周囲を400～700mの山々に囲まれた標高約200～250mの内陸盆地である。気候は，瀬戸内型と山地内陸型の中間となる。また盆地内には，三原湾に注ぐ沼田（ぬた）川・広島湾に注ぐ瀬野川・広湾に注ぐ黒瀬川などの河川の上流域となっているため小支流が多いが，水量が少ないため農業用の溜池が多く造られている。この小支流によって盆地内中心地域は，安定した沖積地が形成されて，県内でも有数の穀倉地帯として知られ『酒都西条』としても有名である。

中央3号遺跡の存在する高屋町は，広義の西条盆地東端に位置している。沼田川の支流である入野（にゅうの）川は，高屋町の中央を東西に流れており，入野川を挟んで北側には，鷹の巣山（534m）・頭崎（かしらざき）山（504m）・岩谷山（505m）の山々が，南側には白鳥（しらとり）山（524m）・馬の背山（455m）などの山々が連なっている。この入野川の両岸には，標高250m前後の低丘陵が広がっているが，ＪＲ西高屋駅から白市駅周辺は広島市への通勤圏となり宅地化が進んでいる。また，西高屋駅の北側の低丘陵一帯は，賀茂学園都市開発整備事業（西高屋地区）に伴い大規模な新住宅市街地（東広島ニュータウン）が，南側は山陽自動車道の建設が行われている。

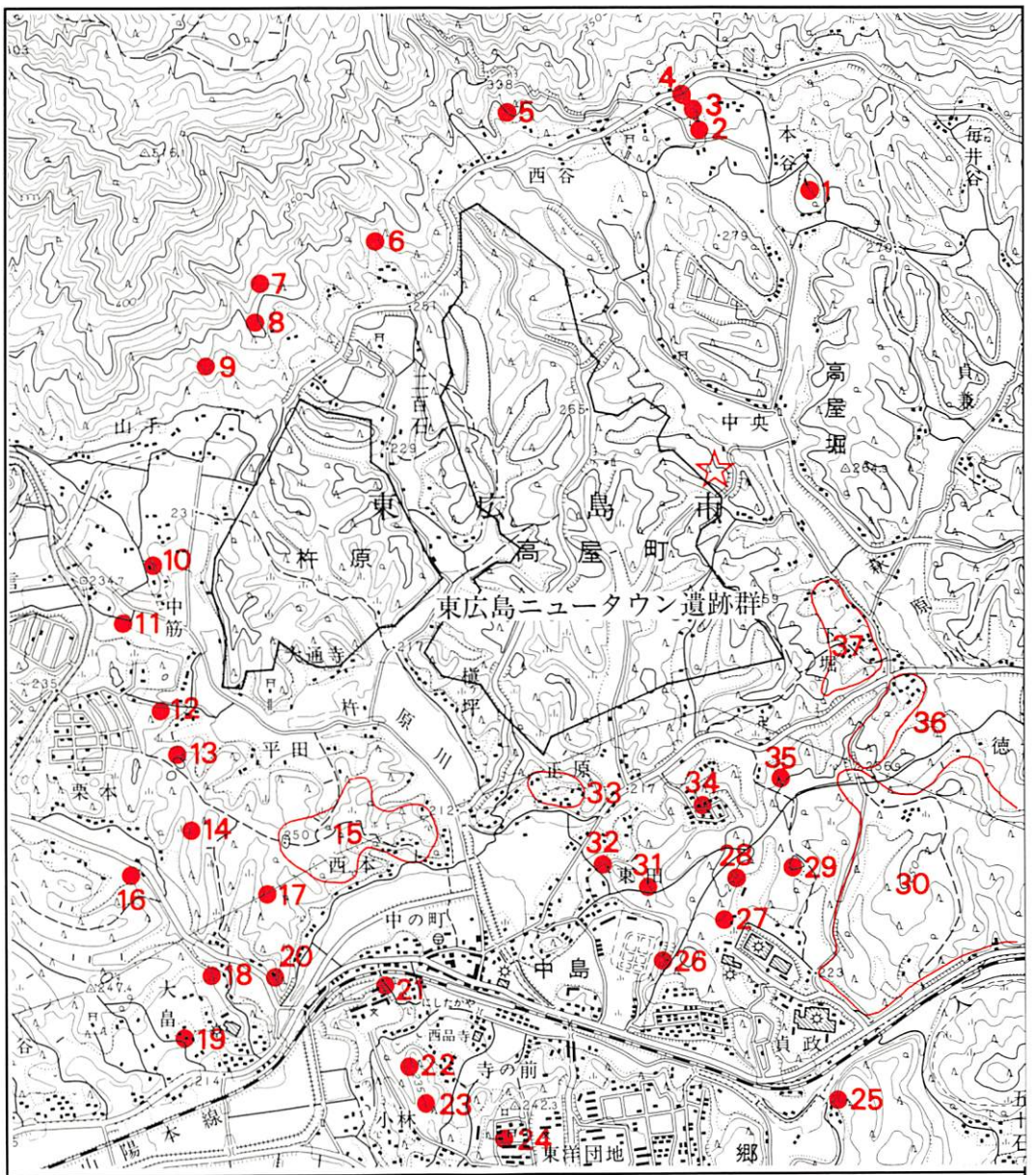
これらの低丘陵一帯には，縄文時代から江戸時代に至るまでの数多くの遺跡の存在が確認されており，こういった開発に伴う発掘調査も近年増加している。

中央3号遺跡は，東広島ニュータウン遺跡群の北東隅に位置している。遺跡の北側には，入野川の支流である萩原川が南東方向に流れ谷間の小沖積地を形成している。遺跡はこの小沖積地を北に望む標高225m，水田面からの比高17mの丘陵斜面に立地している。

2．歴史的環境

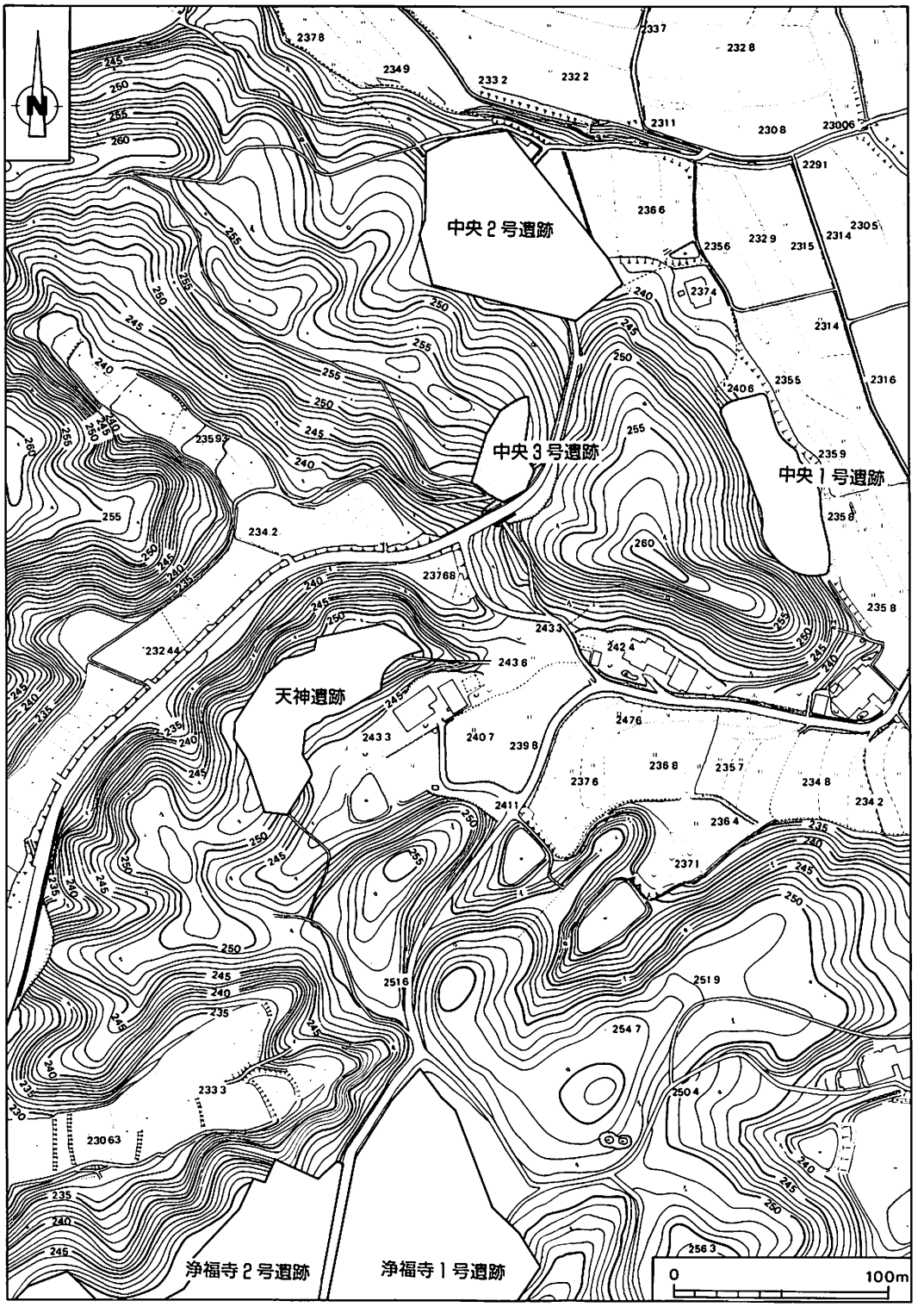
当遺跡が位置する高屋町を中心に主要な遺跡について時代ごとに概観して行きたい。

旧石器時代・縄文時代　当地域では，この時代の遺構は確認されていないが，西条町西ガガラ遺跡[(1)]で後期旧石器時代に属すると考えられる集落跡が調査された。高屋町では，東広島ニュータウン遺跡群内の槙ケ坪3号遺跡[(2)]の表土層から，縄文時代後期の土器片が出土している。また，原の谷遺跡近辺で縄文時代早期と考えられる有茎尖頭器が表面採集されている程度[(3)]である。



☆ 中央3号遺跡	8．足山古墓群	16．栗本遺跡	24．原の谷遺跡	32．鎧田遺跡群
1．御薗宇城跡	9．山手古墳群	17．大畠古墳	25．扇迫遺跡群	33．正原遺跡群
2．塔の岡館跡	10．山手遺跡	18．友光遺跡	26．東田遺跡	34．有助遺跡群
3．平賀氏の墓	11．上杵原遺跡	19．清観古墓	27．福岡山古墓	35．城福寺古墳群
4．塔の岡古墓	12．平田古墓	20．古慈喜城跡	28．貞政遺跡群	36．福神遺跡群
5．権現谷古墳群	13．平田古墳群	21．南鳴子遺跡	29．仙人塚古墳群	37．下堀遺跡群
6．足山第1号古墳	14．大畠遺跡	22．奥之谷古墳	30．福岡山遺跡群	
7．足山古墳群	15．西本遺跡群	23．奥之谷遺跡	31．谷本石棺群	

第2図　周辺遺跡分布図（1：25,000）



第3図　遺跡周辺地形図（1：3,000）

弥生時代　弥生時代に入っても，前期の段階では確認された遺跡の数は少ない。原の谷遺跡では，６号住居跡覆土から壺と甕が出土している[4]。他に，西条町助平（すけひら）１号遺跡[5]の土坑内から土器が，八本松町藤が迫第１号古墳封土下[6]から土器が出土しているにすぎない。中期以降になると，遺跡数は増加し東広島ニュータウン遺跡群[7]や，西本遺跡[8]，原の谷遺跡等が調査されている。これらの遺跡は弥生時代後期の集落と墳墓が中心になるが古墳時代～中世の墳墓も存在している。

古墳時代　古墳時代に入ると遺跡の数は更に増加し，前半期と考えられる三角縁神獣鏡２・素環頭太刀１・碧玉製勾玉が出土した白鳥古墳[9]，珠文鏡１・碧玉製釧１等が出土した仙人塚第１号古墳がある。西条町三ツ城古墳[10]は，県内最大の前方後円墳で全長84m，高さ13mである。他に，全長約30mの前方後円墳である奥の谷古墳・森信第１号古墳が知られている。後半期になると，古墳群として構成されるようになり，横穴式石室を埋葬施設とする足山古墳群，山手古墳群等がある。集落としては，原の谷遺跡・東広島ニュータウン遺跡群内の浄福寺２号遺跡で５世紀～７世紀にかけての竪穴住居跡が調査されている[11]。他に，小谷黄幡（こだにおうばん）遺跡[12]では，一辺が７×５ｍの大型の住居跡が調査された。また，祭祀遺跡として東広島ニュータウン遺跡群内の胡麻２号遺跡[13]から，ミニチュア土器や高杯が大量に出土しており峠に関する祭祀が考えられている。

奈良・平安時代　奈良時代には，西条町に安芸国分寺・国分尼寺が建立されており，西条盆地は安芸国の中心となっていたことが窺える。古代山陽道は，当遺跡の南側を東西に走っていたといわれており高屋町郷を「宇鹿」もしくは「鹿付」の駅に当てる説もある[14]。該当期の遺跡はあまり確認されていないが，浄福寺１・２号遺跡で掘立柱建物跡・竪穴住居跡が，山陽自動車道建設に伴い東山窯跡が調査されている[15]。

鎌倉時代以降　荘園高屋保の地頭職であった平賀氏は，出羽国平鹿郡から来住し高屋堀の御薗宇城に拠った。以後，戦国時代まで当地域を治めており，長い間平賀氏の本拠地であったため，関連する遺跡が多い。平賀氏の山城として御薗宇城跡の他に，白山城跡，頭崎城跡が上げられ，「芸藩通志」には，円満寺・円福寺・明道寺等の廃寺名が記されている。

註

(1) 広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会「広島大学統合移転地埋蔵文化発掘調査年報VII」 昭和63（1988）年

(2) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「賀茂学園都市開発整備事業地（西高屋地区）内遺跡群」Ⅰ 昭和61（1986）年

(3) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「槙ケ坪遺跡（B地区）」広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第72集 昭和63（1988）年

(4) 東広島市教育委員会「埋蔵文化財調査報告書」 昭和60（1985）年

(5) 広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅰ）」 昭和58（1983）年

(6) 広島県教育委員会『広島県文化財調査報告第9集』「藤が迫遺跡群」 昭和46（1971）年

(7) 註(2)及び財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「賀茂学園都市開発整備事業地（西高屋地区）内遺跡群」II・III 昭和62（1987）年・昭和63（1988）年

(8) 広島県教育委員会「西本遺跡群―A・B・C地点―」 昭和51（1976）年
東広島市教育委員会「西本遺跡群―D・E・F地点―」図録篇 昭和51（1976）年

(9) 松崎寿和・潮見浩「先史時代の広島地方」『新修広島市史』第1巻 昭和36（1961）年

(10) 広島県教育委員会「三ツ城古墳」 昭和29（1954）年

(11) 註(7)に同じ

(12) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター・東広島市教育委員会「小谷黄幡遺跡見学会資料」 昭和62（1987）年
財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「ひろしまの遺跡」32号 (財)広島県埋蔵文化財調査センター報 昭和63（1988）年

(13) 註(2)に同じ

(14) 水田義一「山陽道―安芸国」藤岡謙二郎編『古代日本の交通路III』 昭和53（1978）年

(15) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター・東広島市教育委員会「志村古墳群・柳原遺跡見学会資料」 昭和63（1988）年
財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「ひろしまの遺跡」34号 (財)広島県埋蔵文化財調査センター報 昭和63（1988）年

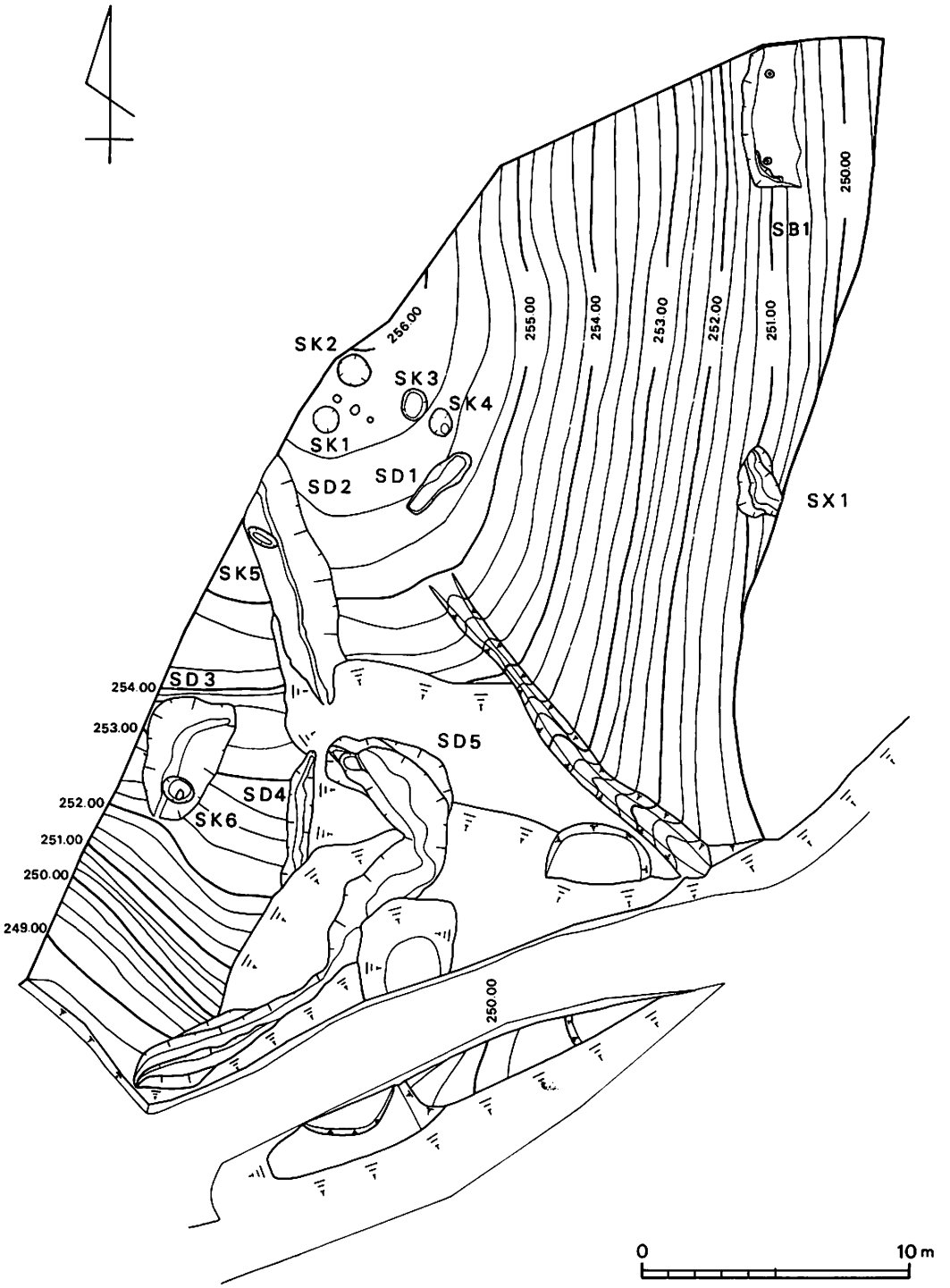
III 調査の概要

発掘調査は，東広島ニュータウン遺跡群と近接していることから，浄福寺１・２号遺跡で設定した座標を用いて調査区の設定を行った。調査区内は，旧道路の建設や土取りによって攪乱を受けていたが，試掘調査によって住居跡２・土坑１が確認されていた。住居跡の内１軒は，後世の土取り跡であった。

調査の結果，調査区内最高所から貯蔵穴４・溝１，北側斜面で住居跡１，南側斜面で墳墓２・溝４を検出した。

貯蔵穴は，径約1.0m，深さ約1.5m前後の規模である。時期は，ＳＫ２・４の出土遺物から弥生時代後期と考えられる。住居跡は，北側の調査区外に延びており現存規模で約5.0mである。柱穴は２本検出したが，斜面側下半は床面が流出しているため検出できなかった。床面付近から須恵器の甕・杯身が出土し，その特徴から時期は，平安時代初め頃と考えられる。調査区の南半分で，南北方向の溝４を検出した。幅は1.0～2.5m，深さ0.2～1.4mである。これらの溝の内，ＳＤ２の下層から土師質土器の皿が出土しており，鎌倉～室町時代にかけて形成されたと思われる。また，ＳＤ２・３の埋土を掘り込んでいるＳＫ５・６を検出した。いずれも火葬墓で，ＳＫ６からは人骨とともに古銭が１枚出土した。これらの墳墓の時期は，江戸時代頃と考えられる。

第４図　遺跡遠景（東から）



第5図　遺構配置図（1：250）

第6図　完掘状況（東から）

Ⅳ 遺構と遺物

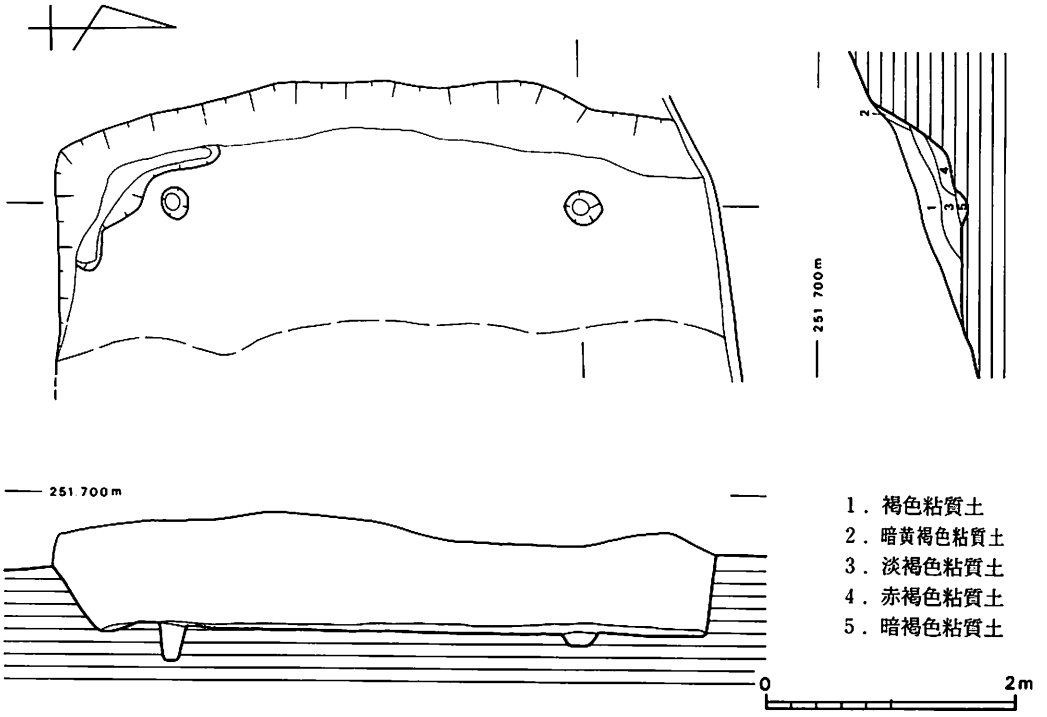
1．住居跡

ＳＢ１（第７・８図）

ＳＢ１は，調査区内最北部に位置し，調査区北側の急斜面が緩やかになる変換点に立地しており，検出した遺構中最も低い位置になる。平面の北側が，調査区外に延びていることや，東側が流失していることから，遺存状態は悪く全体の規模は不明である。

現存部分での規模と平面形は，西側の壁が一辺５ｍ以上，南側の壁が1.7ｍ以上の長方形か方形であると思われる。深さは，斜面山側で検出面から約0.6ｍである。壁よりで径0.3ｍ，深さ0.1～0.3ｍの柱穴を２基検出した。他の柱穴は，精査を行ったにもかかわらず検出できなかった。また，床面の西南隅で幅0.2ｍ・深さ５cmと浅い壁溝の一部を検出した。覆土は，自然堆積であることが窺え，第１層から弥生土器が，床面直上ではないが第４層から須恵器の杯・甕が出土した。

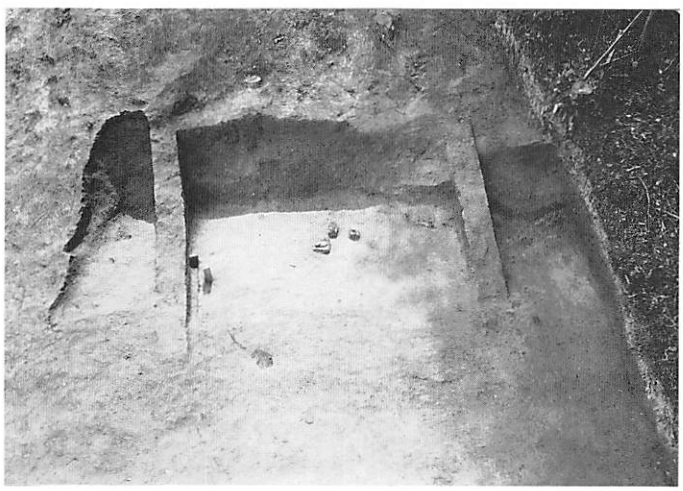
調査区外にも同様の傾斜の変換点が北へ続いていることから，ＳＢ１と同様の住居跡が北側に存在していると思われる。



第７図　ＳＢ１実測図（１：60）

作業風景

遺物出土状況（東から）

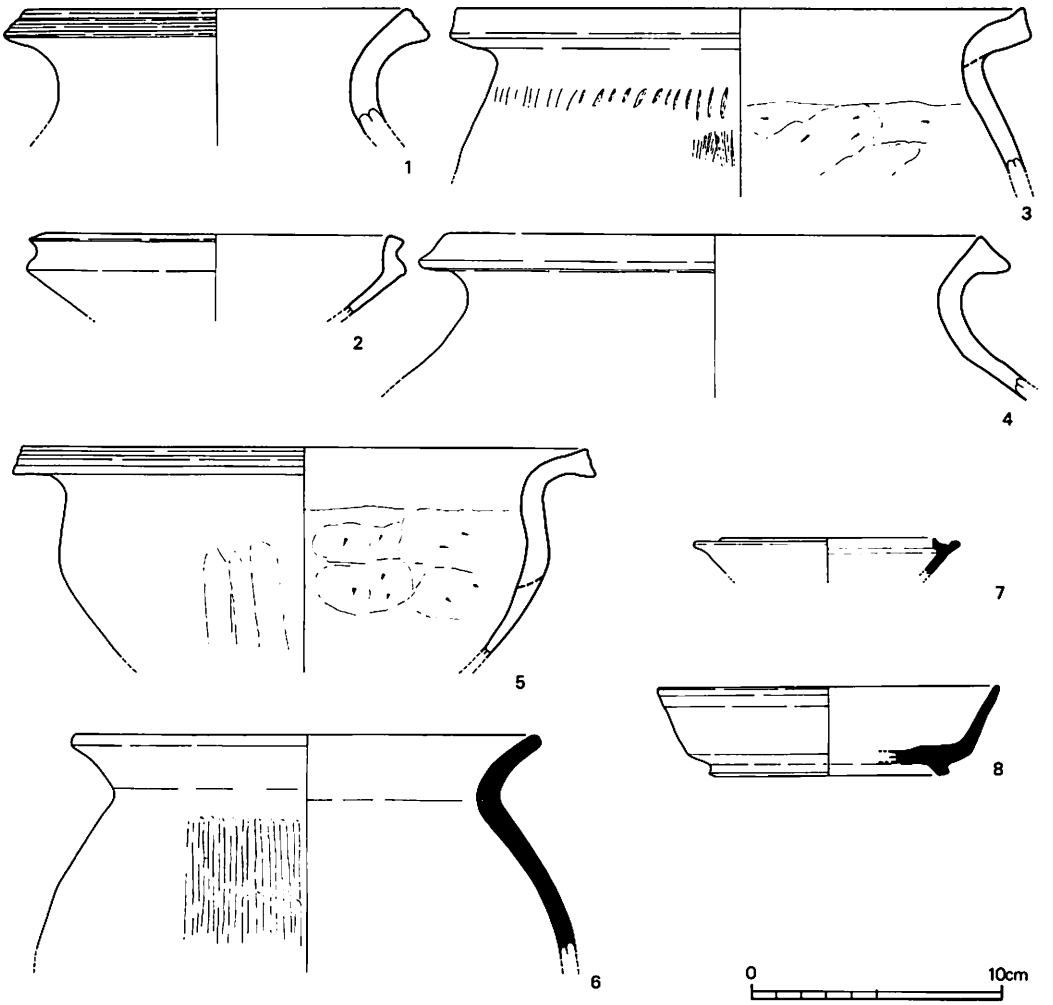


完掘状況（南から）

第８図　ＳＢ１遺物出土状況及び完掘状況

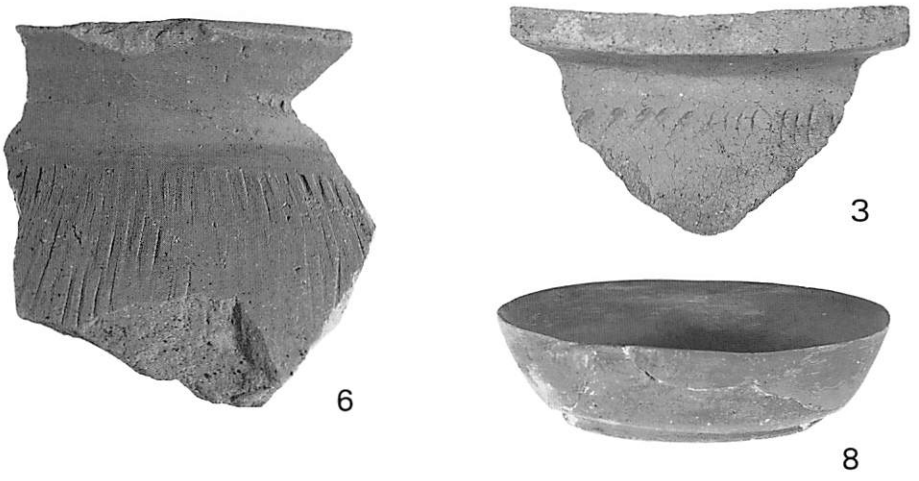
ＳＢ１出土遺物（第９・第10図）

１～５は覆土の第１層から，６～８は第４層から出土した。１は，壺形土器の口縁部の破片で，復元口径は14.5cmである。内外面ともにナデが施され，口縁端面には，３条の凹線文が巡っている。焼成はやや甘く，色調は黄褐色である。３・４は，ともに甕形土器の口縁部で，３は頸部外面にヘラ状工具による刺突文が巡り，刺突文の下方ではハケ目が残る。内面は，ヘラ削りが斜め方向に残る。口縁部は，内外面ともヨコナデが行われており，くびれ部から肥厚し，端面は上方に拡張して中央がやや凹んでいる。焼成は甘く，色調は暗茶褐色である。４は，復元口径21.4cmで，口縁部は内外面ともにヨコナデが施されている。端面は，下方に拡張を行いやや凹んでいる。頸部は，内外面とも摩耗により調整が不明で



第９図　ＳＢ１出土遺物実測図（１：３）

ある。焼成は甘く，色調は淡黄褐色である。5は，復元口径22.6cmの鉢である。口縁部は，内外面ともヨコナデ，端面は，上・下方に拡張され2条の凹線文が施されている。胴部の内面は，横・縦方向のヘラ削りが，外面は，板状工具による縦方向のナデが残る。焼成はやや甘く，色調は淡黄褐色である。2は，復元口径14.0cmの高杯形土器の口縁部と思われる。胴部外面は，ナデによる調整が，内面は，摩耗しているため不明である。口縁部は，やや内傾ぎみに立ち上がってから外反しており，ヨコナデが施されている。6は，復元口径18.4cmの須恵器の甕で，口縁部は外反し，ヨコナデが施され，端面は丸く終わっている。胴部の外面は，5条の櫛状工具による縦方向の条痕が残っている。内面は，同心円文の後ナデによって消されている。頸部は，条痕の後ヨコナデが行われている。焼成は良好で，色調は淡青灰色である。7は，復元口径8.6cmの杯身で，焼成は良好で，色調は青灰色である。立ち上がりは強く内傾し，受部から僅かしか出ていない。受部は，先の丸いヘラ状の工具によって沈線状に窪んでいる。口縁部周辺は，ヨコナデが施されている。器表面の一部に自然釉が付着している。8は，復元口径13.6cm・器高3.5cmの杯身である。調整は，底部から口縁部にかけて内外面ともにヨコナデが施されている。口縁端部は，丸く終わっている。高台は，外方に張り出しており，貼り付けによる。焼成は良好で，色調は淡青灰色である。



第10図　ＳＢ１出土遺物

2．貯蔵穴

調査区内のほぼ中央部の最高所に位置している。この地点は，調査前に墓地であったことから攪乱が予想されたが，ＳＫ１～４の４基を確認した。

ＳＫ１（第11・12図）

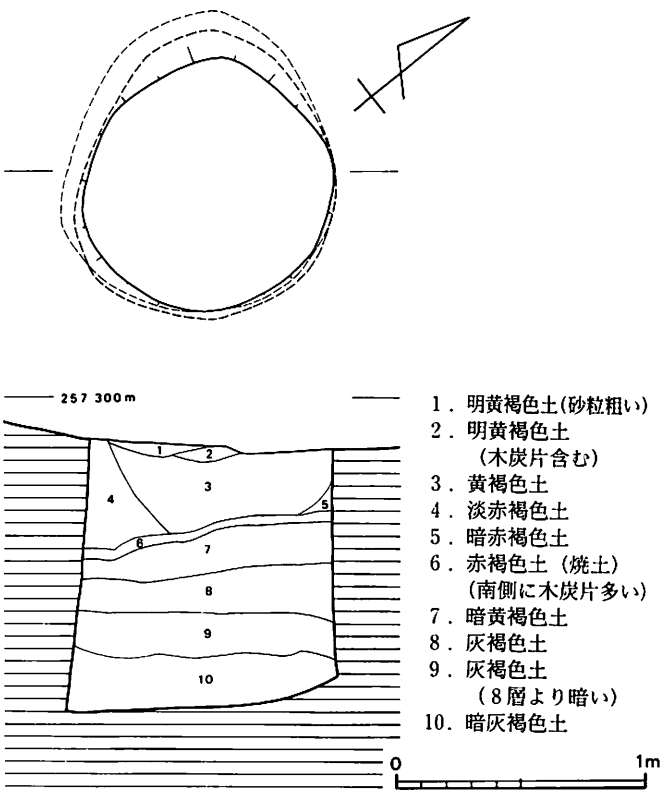
ＳＫ２から南西へ1.2mの地点に位置している。

規模・平面形は，径約1.0mの円形，床面は径1.1～1.2mの楕円形である。深さは，検出面から約1.0mで，壁は，断面形がフラスコ状に掘り込まれている。坑内の一部は，木の根による攪乱を受けていた。床面は，平坦であるが南から北の隅に向かってやや傾斜している。覆土の堆積状況は，ほぼ水平に堆積しており，第６層で焼土と炭化物の堆積が見られる。遺物は，土器を含めて全く出土していない。

ＳＫ２（第13・15図）

調査区内最高所に位置し，ＳＫ１の北東に約1.2m離れて位置している。

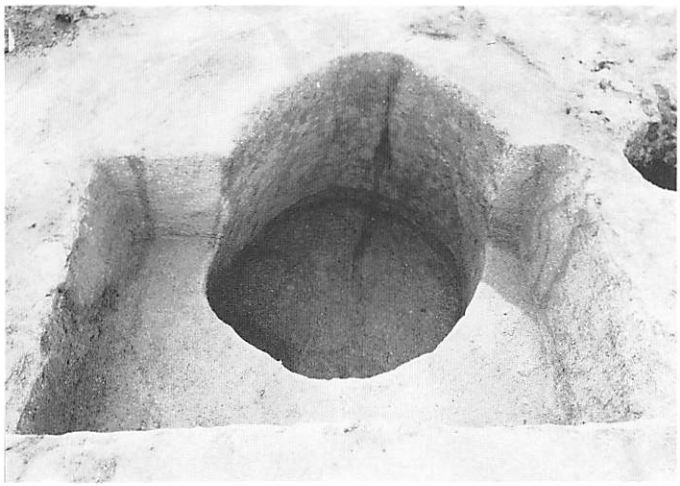
規模・平面形は，径約1.1mの円形で，床は径1.2～1.4mの楕円形である。深さは，検出面から約1.1mである。壁は，ＳＫ１と同様にフラスコ状に掘り込まれているが，北側の壁は，本来第３層であったと考えられる。遺構の検出面は，第１・２層の上面である。覆土の堆積状況もＳＫ１と似ており，第５層より焼土及び炭化物が，遺物は，第４層より壺が出土している。ＳＫ１・２は，規模・形状・覆土の堆積状況が酷似していることや近接していることなどからお互いに意識して造られたと考えられる。以上のことから，ＳＫ１からは，遺物が出土していないが，これらの貯蔵穴は同時期と思われる。



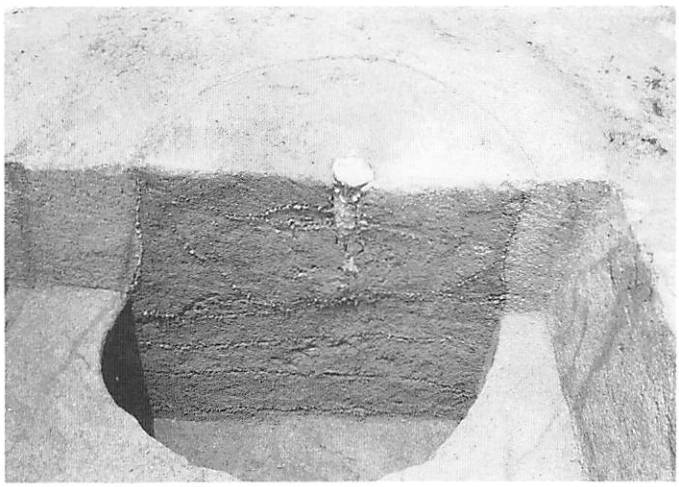
第11図　ＳＫ１実測図（１：30）

作業風景

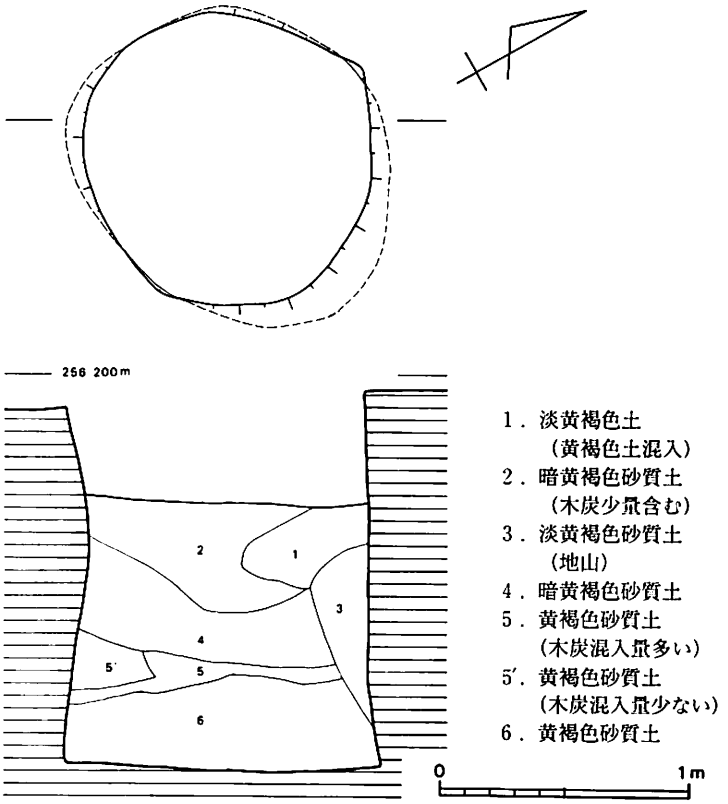
完掘状況（南東から）



土層断面（南東から）



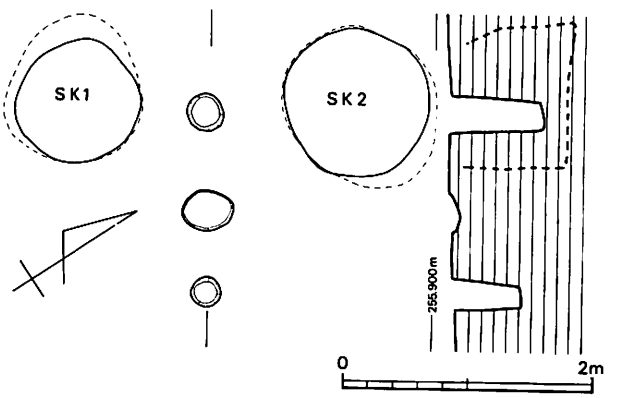
第12図　ＳＫ１土層断面及び完掘状況



第13図　ＳＫ２実測図（１：30）

柱穴群（第14・15図）

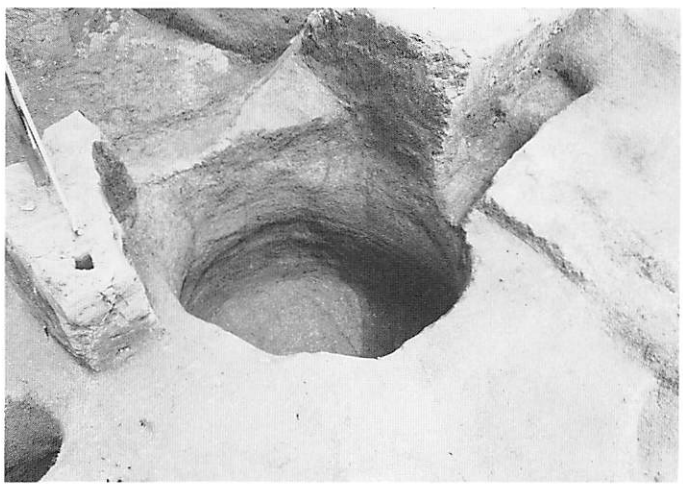
ＳＫ１・２のほぼ中央部から東西方向に２基の柱穴と思われる遺構を検出した。これらの柱穴の柱間寸法は，芯々で1.5mである。規模は，両方ともに径25cm前後，検出面からの深さ50～70cmである。また，２基の柱穴のほぼ中央に径50cm，深さ10cm程度の浅い土坑を検出したが，この土坑と柱穴の関係は不明である。これらの柱穴は，ＳＫ１・２の主軸と直交していることから同時期に存在していた可能性も有り，性格は不明であるが，或は貯蔵穴を覆っていた覆屋の柱穴とも考えられる。



第14図　柱穴群実測図（１：60）

ＳＫ２土層断面（南東から）

ＳＫ２完掘状況（南から）



貯蔵穴群（北から）

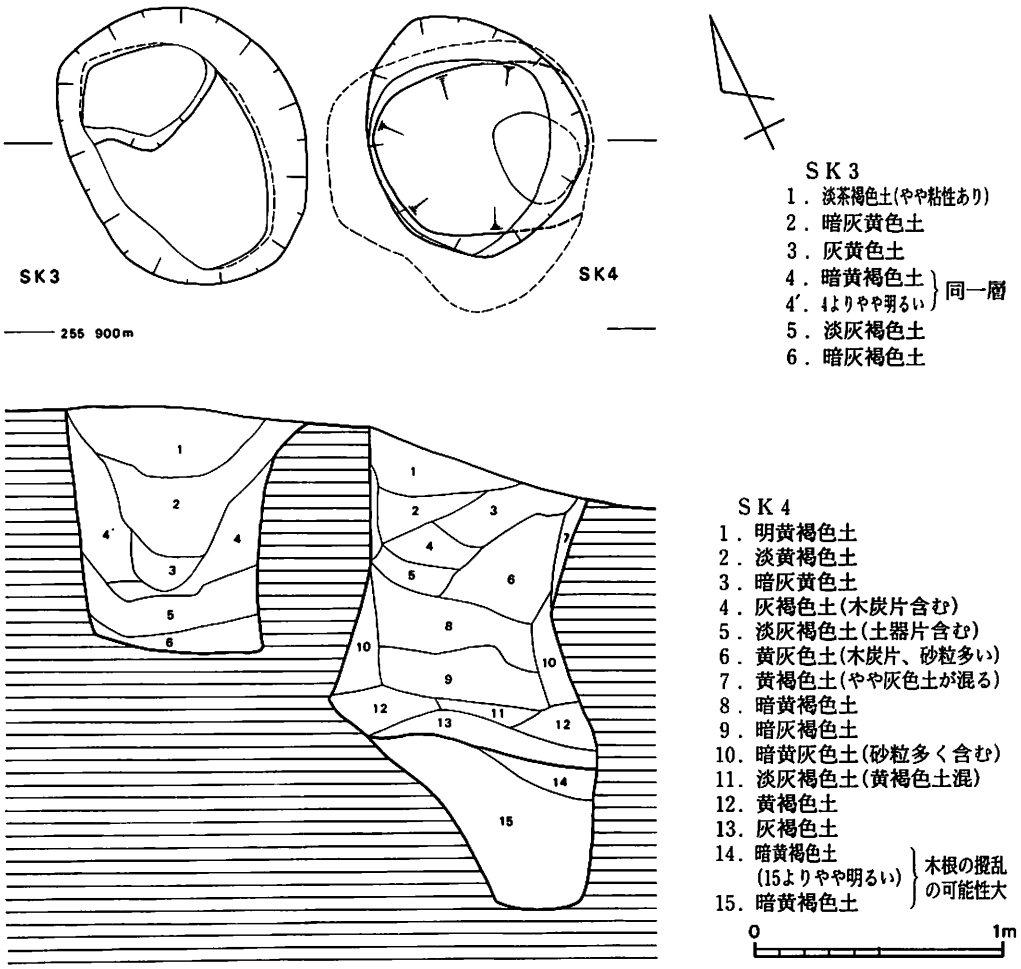
第15図　ＳＫ２土層断面及び完掘状況・貯蔵穴群

ＳＫ３・４（第16・17図）

ＳＫ３・４は，ＳＫ１・２から東へ1.3mの地点に位置している。ＳＫ３と４は，近接しており約25cm離れている。

ＳＫ３の規模・平面形は，検出面からの深さが約１ｍで，長径1.1m，短径0.9mの楕円形である。床面も同様に長径1.0m，短径0.6mの楕円形で北隅が10cm程度窪んでいる。断面形は，ビーカー状である。覆土は，土層観察から自然堆積であることが窺える。遺物は出土してない。

ＳＫ４の規模・平面形は，上面が径約0.7m，床面が径約0.9mの楕円形である。検出面からの深さは，約1.3mであるが，第14・15層から木根による攪乱を受けており，深くなっている。本来の床面は，14・15層の上面と考えられる。断面形は，フラスコ状である。覆



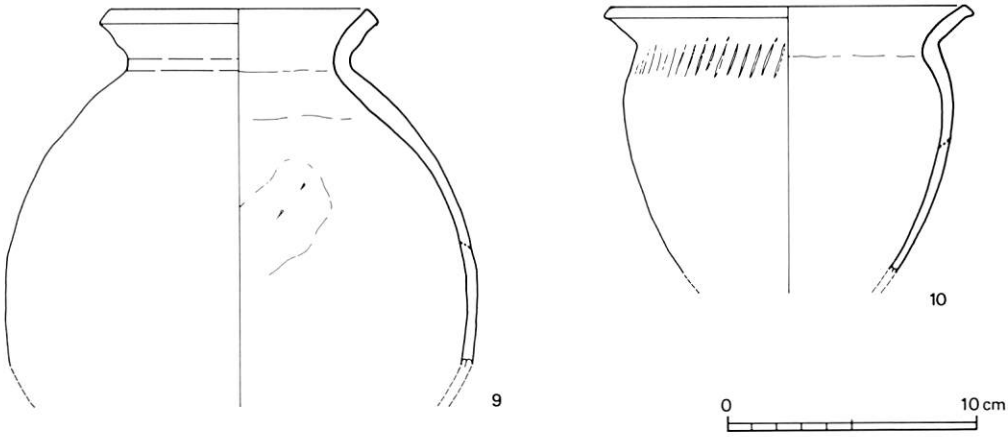
第16図　ＳＫ３・４実測図（１：30）

ＳＫ３・４完掘状況(北から)

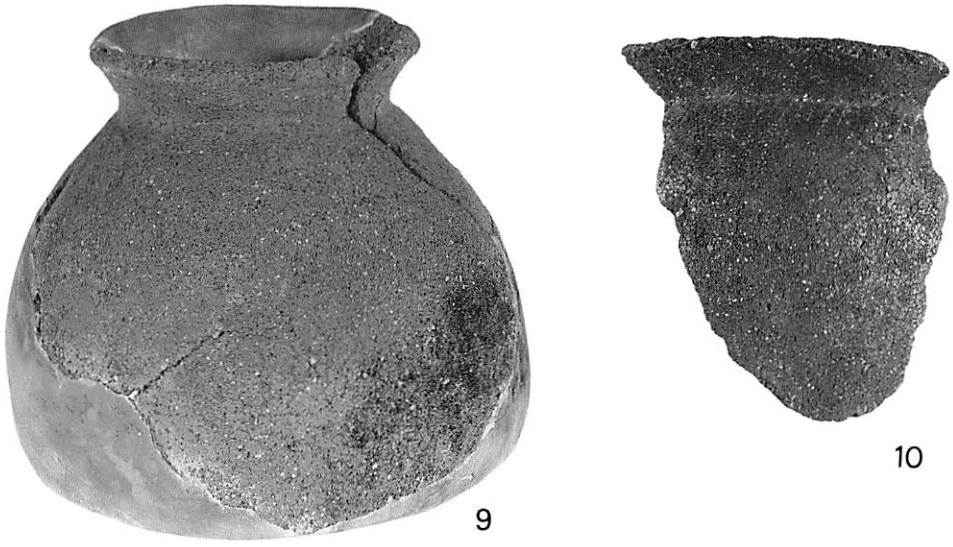
ＳＫ３土層断面（北から）

ＳＫ４土層断面（北から）

第17図　ＳＫ３・４土層断面及び完掘状況



第18図　ＳＫ２・４出土遺物実測図（１：３）



第19図　ＳＫ２・４出土遺物

土は，ＳＫ３と同様に自然堆積である。遺物は，第８層から鉢が１点出土している。ＳＫ３・４は，ＳＫ１・２と同様に近接しており，重複もないことから互いに意識して掘り込まれていたと考えられる。

出土遺物（第18・19図）

９は，ＳＫ２の下層から出土した壺形土器である。復元口径は10.2cmで，焼成はやや甘く，色調は淡茶褐色である。胴部は球形で，最大径が中位にある。器表面は，ナデによる調整が，内面はヘラ削りによる成形痕が残るが後にナデている。口縁部は，胴部から僅かではあるが垂直に立ち上がってから外反し，内外面ともヨコナデが施されている。器表面

の一部に煤が付着している。10は，ＳＫ４の下層から出土した復元口径14cmの鉢形土器である。器表面は，ナデによる調整が，内面はヘラ削りの後，ナデている。口縁部は，外反し内外面ともにヨコナデが施されている。端面は，僅かに下方につまみ出している。頸部は，ヘラ状工具による刺突文が巡っている。焼成は甘く，色調は暗赤褐色である。

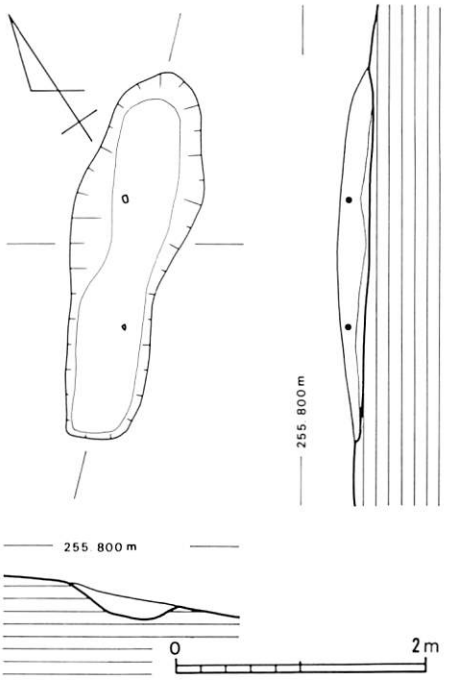
３．溝

ＳＤ１（第20・21図）

ＳＤ１は，調査区内最高所に位置する貯蔵穴群の北東側の斜面に位置している。

主軸は，北東～南西方向で，規模は，長さ約3.0m，幅が0.7～1.0m，深さ約10cmである。壁は，断面形が「U」字状であるが，北半分の掘り込みの傾斜が緩やかになっており，底は北東側が深くなっている。覆土は，暗黄褐色土の単一層であった。また，図示し得なかったが，覆土の上層で，弥生時代後期と思われる甕か壺の口縁部の破片が２点出土している。

ＳＤ１は，貯蔵穴群の北東部の区画を示すかのように位置しているが，貯蔵穴との関係は不明である。



第20図　ＳＤ１実測図（１：60）

第21図　ＳＤ１遺物出土状況

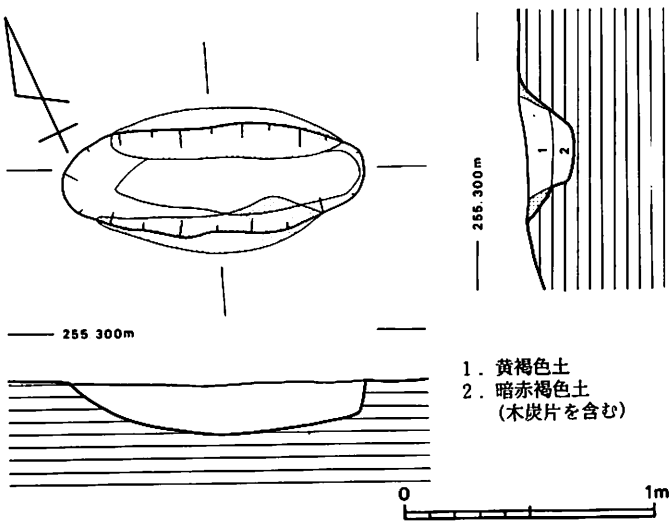
4．墳　墓

ＳＫ５（第22・24図）

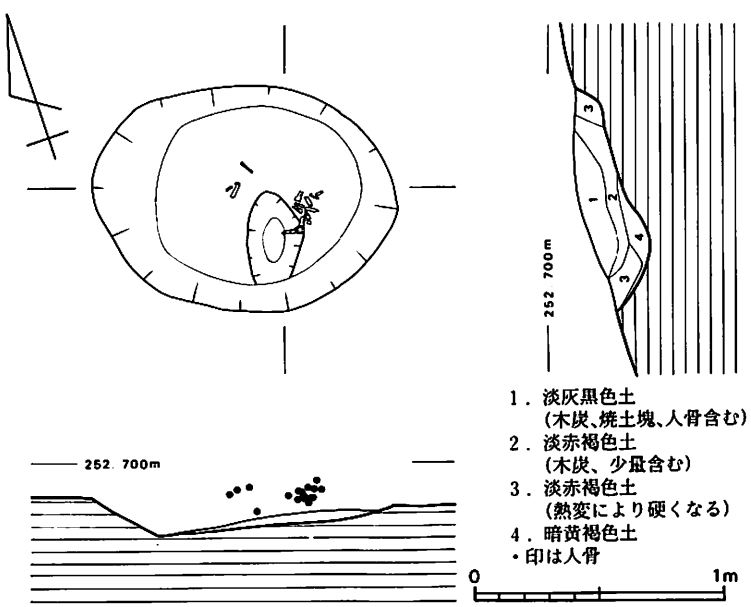
ＳＫ５は，貯蔵穴群のＳＫ３から南西に約4.5mに位置している。また，ＳＤ２の覆土の上層面で検出した。

規模・平面形は，長径1.2m・短径0.6mの長楕円形である。深さは，最深部で35cmである。縦断面から，西壁が緩やかに掘り込まれているのに対して，東壁は，ほぼ垂直に掘り込まれている。また，南北両壁が熱によって赤褐色に変化している。覆土は，第２層が焼土・炭化物を多量に含んでいる。遺物は，全く出土していない。

先述の特徴から，ＳＫ５は，火葬墓であった可能性がある。

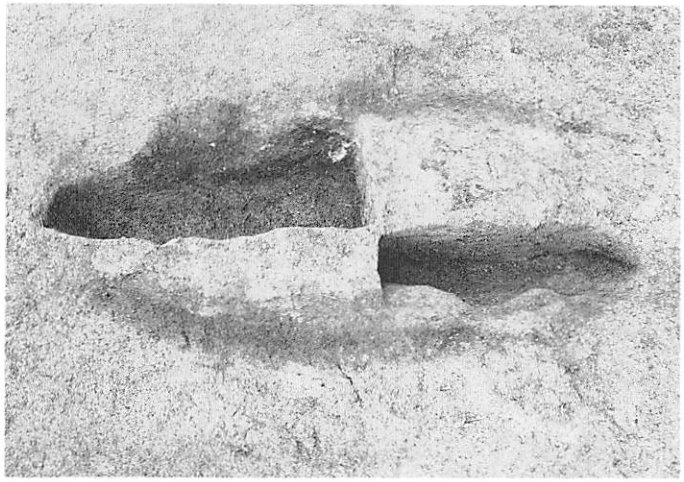


第22図　ＳＫ５実測図（１：30）（アミ目は焼土）

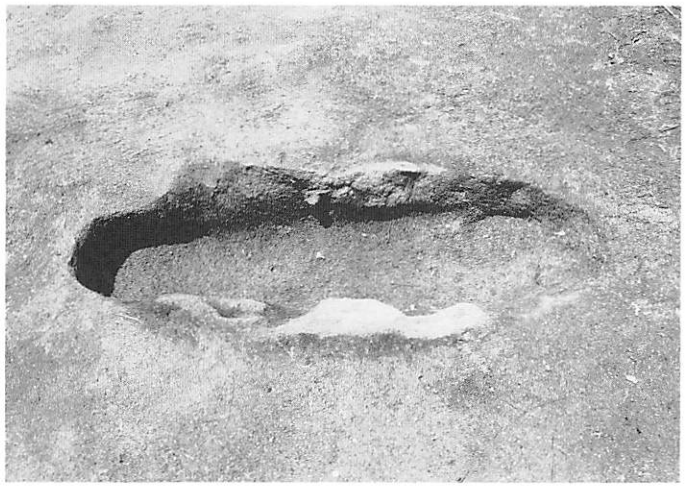


第23図　ＳＫ６実測図（１：30）

土層断面（北から）



完掘状況（北から）



作業風景

第24図　ＳＫ５土層断面及び完掘状況

人骨出土状況（東から）

作業風景

第25図　ＳＫ６人骨出土状況

ＳＫ６（第23・25図）

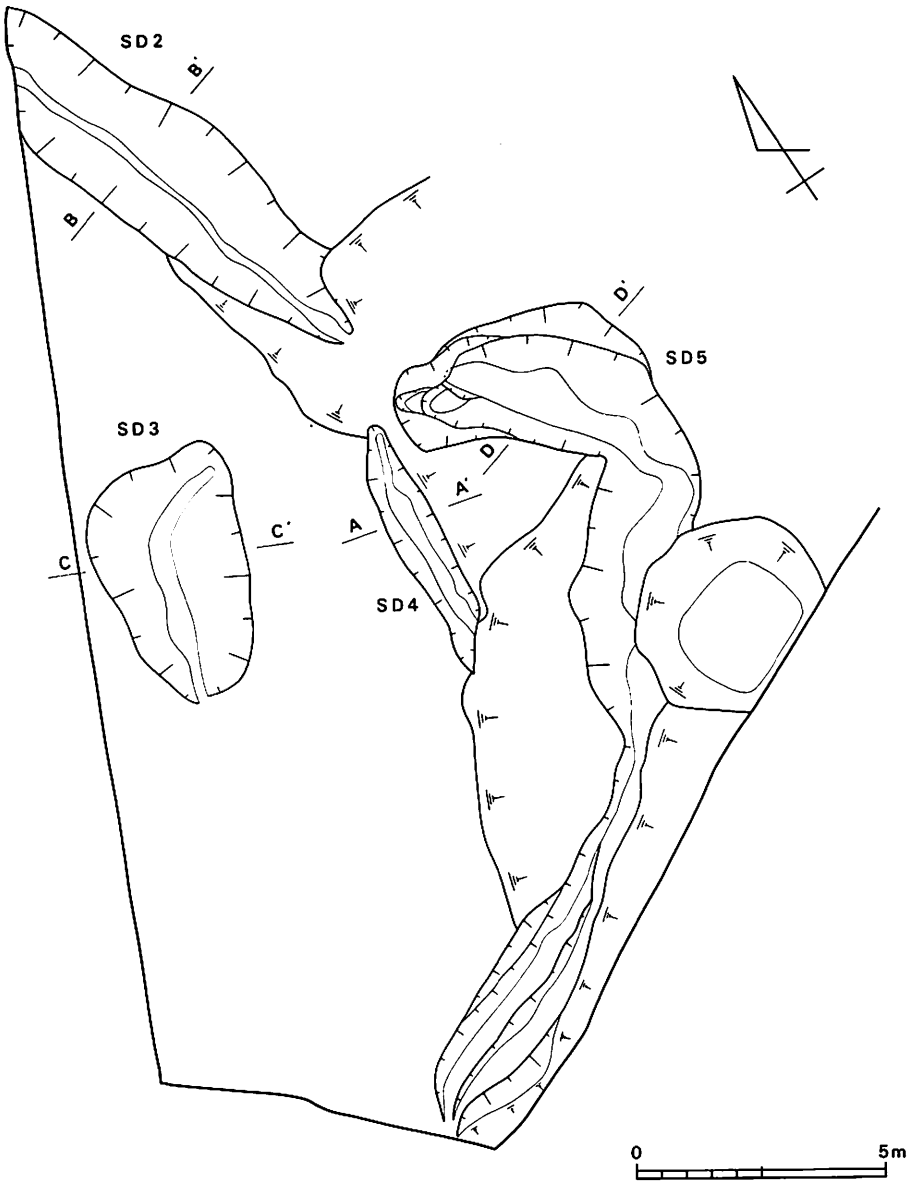
ＳＫ６は，ＳＫ５から南に10m離れ，調査区内の南側斜面が急傾斜になる変換点に立地している。また，ＳＫ５と同様にＳＤ３の覆土を掘り込んでいた。

規模・平面形は，長径1.2m・短径0.9mの楕円形で，深さは約10cmである。底面の南隅に，長径30cm・短径20cmで，深さ10cmの浅い落ち込みを検出した。土層観察から第３層は，熱変により硬化しており，遺物は，第１～２層から木炭・焼土塊・人骨が出土した。これらのことからＳＫ６は，火葬墓であったことが窺える。また，人骨とともに古銭が１枚出土したが，遺存状態が極端に悪く銘は判読しえなかった。

5．その他の遺構

溝（第26・27・28図）

調査区の南側斜面で，ＳＤ２～５の溝を検出した。ＳＤ２は，試掘調査によって確認されていた。この南側斜面は，最近まで土取りが行われており広範囲にわたって攪乱を受けていた。



第26図　ＳＤ２～５実測図（１：150）

ＳＤ２は，貯蔵穴群の南西の地点から，南方向に流下している溝である。北側は，調査区外へ延びており，南側は，攪乱によって消滅しているが，ＳＤ４あるいはＳＤ５と本来同一の溝であった可能性もある。

現存部分での規模は，幅2.5m，深さ0.8mで，長さは約3.5mである。土層観察から，短期間で埋没したことが窺える。遺物は下層から，土師質土器の小皿が１点出土した。壁は，急傾斜に掘り込まれており，断面形は「Ｖ」字状である。また，ＳＤ２の最北部で覆土を掘り込んでＳＫ５が存在していた。

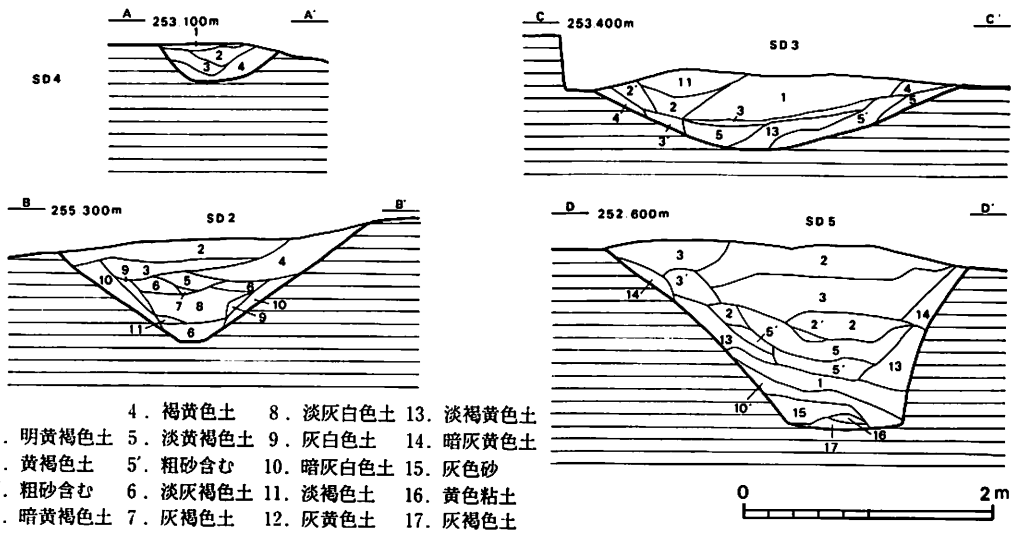
ＳＤ３は，ＳＤ２から南西に約３m離れ単独で位置している。南側は消滅しており，この地点から傾斜が急になる。

現存の規模は，幅1.2m・深さ約0.5m・長さ約２mで，東から南へ流れていたと思われる。壁は緩やかに掘り込まれ，断面形は「Ｕ」字状である。最南部で覆土を掘り込んでＳＫ６が存在していた。遺物は全く出土していない。

ＳＤ４は，ＳＤ３から東へ1.2mの地点に位置している。今回検出した溝のなかでは最も規模が小さい。南側は攪乱によって消滅している。

現存の規模は，幅0.4m・深さ0.3m・長さ２mで，南に流れていたと思われる。断面形は「Ｕ」字状である。遺物は出土していない。ＳＤ４は，ＳＤ２と本来繋がっていた可能性がある。

ＳＤ５は，ＳＤ２から南に0.6mの地点に位置している。北壁から2.5mの地点で，南西に流路が変換している。この変換点から，旧道造成と土取りによって東側の壁が攪乱を受



第27図　ＳＤ２～５土層断面図（１：60）

ＳＤ２・３土層断面
（北東から）

ＳＤ５土層断面（南から）

ＳＤ２作業風景

第28図　ＳＤ２・３・５土層断面

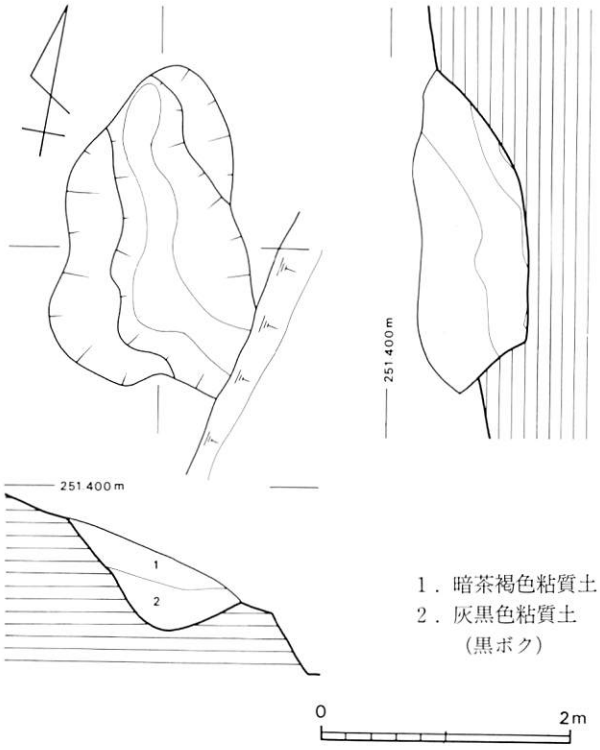
第29図　ＳＤ２出土遺物実測図（１：３）

けている。

現状の規模は，幅1.1m，深さは最深部で1.5m，長さは変換点までが2.0m，変換点から3.5mである。北側部分の壁は２段に掘り込まれており，溝の底面も２段に落ち込んでいる。また，土層観察からＳＤ２と同様に比較的短期間で埋没したと思われる。

ＳＤ２出土遺物（第29図）

ＳＤ２の下層から出土したほぼ完形の土師質土器小皿である。口径は，12.2cm，底径6.1cm，器高3.3～3.5cmである。口縁部は，内外面ともにヨコナデが行われ，端部は丸く終わっている。底は，回転ヘラ切りによって離され，ロクロの回転は時計の逆回りである。底部は，器厚が1.1cmと厚く，口縁部との境に先の丸い工具により段を巡らせている。色調は淡



第30図　ＳＸ１実測図（１：60）

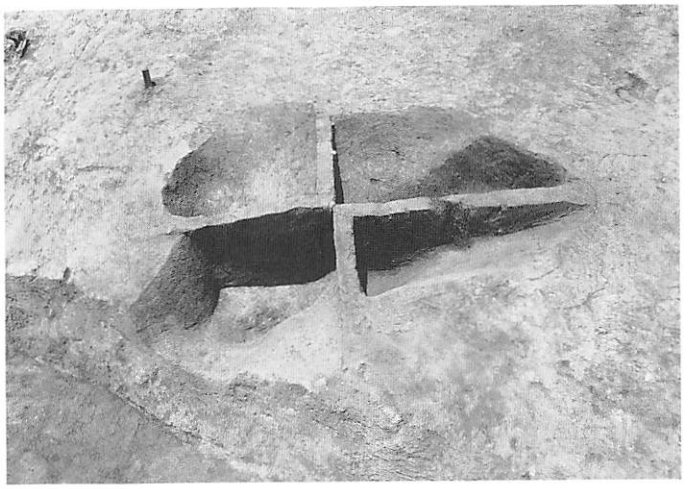
黄褐色で，焼成はややあまい。

ＳＸ１（第30・31図）

ＳＸ１は，調査区の北側斜面のほぼ中央で，ＳＢ１から南へ約10mの地点に位置している。急斜面に立地しており，南東隅は畑の造成により消滅している。

規模・平面形は，長径2.5m・短径1.4m，深さは斜面側から約1.0mの不整楕円形である。壁は，２段に掘り込まれており，底面は，南側で東に延びている。覆土は２層からなり，自然堆積であることが窺える。性格は不明で，遺物は出土していない。

土層断面（東から）



完掘状況（南東から）

第31図　ＳＸ１土層断面及び完掘状況

ま　と　め

今回の発掘調査によって，中央３号遺跡は，弥生時代から古代・近世にかけて断続的に営まれていたことが判明した。しかし，各期の遺構が，それぞれ単独で存在しているため遺跡全体の性格は明瞭にできない。ここでは，今回検出した遺構について時期・性格を述べてまとめとしたい。

貯蔵穴は，４基検出した。ＳＫ２・４から土器が出土しており弥生時代後期中葉から後葉にかけての特徴が見られ[(1)]，貯蔵穴との関連が考えられる柱穴群やＳＤ１を含めて同時期に比定できよう。また，本遺跡と谷を挟んで南側の丘陵上に存在する天神遺跡は，弥生時代後期を中心にした集落跡である。ここでは貯蔵穴が丘陵端に集中して存在しており，やや離れて住居跡が確認されていることから，貯蔵穴のみ単独で存在するとは思われず同一丘陵の北西側に当該期の住居跡の存在が考えられる。

ＳＢ１は，斜面を削平して平坦面を造成し，その平坦面に構築している。柱穴は２本確認したが比較的浅く，西側の柱穴は床面とともに流失したと思われる。この平坦面は，調査区外の北方向に延びており，浄福寺２号遺跡で見られたような掘立柱建物跡群[(2)]となる可能性もある。時期は，覆土最下層の壁隅から出土した須恵器の杯・甕から，７世紀終わり頃[(3)]と考えられる。

ＳＤ２～５の溝は，流入土の観察から早い段階で埋没したことが窺われるのであるが，断面形や溝の形態・配置から自然流路の可能性が強いと考えられる。ＳＤ２の下層から土師質土器の皿が出土しており，埋没した時期は鎌倉時代～室町時代と思われる。

火葬墓と考えられるＳＫ５・６[(4)]は，移転前に墓地であった地点と僅かしか離れておらず墓域が確定される以前に営まれたとすると，墓碑のうち最も古いのが江戸時代後期であることから，時期は概ね江戸時代と考えられる。

今回の調査によって上記の遺構を確認したが，これらの遺構は，調査区が丘陵端に限られていたこともあり調査区域外の丘陵尾根上へ延びていることが考えられる。このことから本遺跡は，中央２号遺跡と併せて遺跡の範囲が丘陵全体に広がっていると想定できる。

中央３号遺跡が位置している周辺の丘陵一帯は，現在，賀茂学園都市開発整備事業による住宅団地の造成によって変貌を遂げようとしている。東広島ニュータウン遺跡群は，東地区で約６万m²の遺跡の調査が行われ，弥生時代後期を中心とした墳墓と集落の存在が明らかになった。これらの遺跡の大部分は，杵原川によって形成された沖積地を生産基盤としていたと思われるが，本遺跡は萩原川によって形成された沖積地に面しており，生産基

盤はこの地に求められる。

註

(1) 西条盆地内の弥生時代後期の土器編年は，下記の文献の編年案を参考にした。

財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「大槙遺跡群」西条バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書　広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第38集　昭和60（1985）年

広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会「広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報」III　昭和58（1983）年

藤野次史・道上康仁「安芸南部地域（西条盆地周辺）」『広島県の弥生土器』―'85年度考古企画展「墓と土器でむすぶ山陽・山陰」特集―広島県立歴史民俗資料館　みよし風土記の丘友の会　昭和60（1985）年

(2) 浄福寺２号遺跡で３群の建物跡群が検出された。本遺跡と同様に斜面に立地しており弥生時代後期である。財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「賀茂学園都市開発整備事業地内（西高屋地区）遺跡群」II　昭和62（1987）年

(3) 県内では，該当期の須恵器の編年が明確でなく久井町・小林１号窯跡出土遺物などから７世紀の終わり頃と思われる。

(4) 浄福寺２号遺跡でもＳＫ５と同形態の墳墓が検出されている。棺を置き火の廻りを良くするため楕円形に穴を掘り遺体を荼毘に付したと考えられる。

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書　第74集

中央3号遺跡発掘調査報告書

発行日　平成元（1989）年 3 月 31 日
編　集　財団法人　広島県埋蔵文化財調査センター
発　行　〒733　広島市西区観音新町4－8－49
電話（082）295－5751
印　刷　産興株式会社
広島市中区舟入南1丁目1番18号
電話（082）232－4286